



コラムコーナー

国立保健医療科学院スタッフのコラムを紹介するよ!

災害保健研究者の立場から

奥田 博子

人が健康であるためには、こころ(精神)も身体も良好な状態であることが重要となります。しかし、東日本大震災後は、放射線・放射能の影響に対して、多くの方々に不安をもたらしてきました。特に保育士さんが日々関わる子ども達は、身体的にも精神的にも未熟な状態で生まれ、大人に保護され、養育される対象です。そのため、成長・発達の著しい乳幼児期の保護者の方は、将来への影響も含め、一般の大人以上に大きな不安感を抱かれます。そのような保護者や子ども達のために、各保育園において、育児(自然, 体験, 生活リズムなど)、食事(飲料水, 食材など)、保護者(不安, 悩み等)対応など、多様な課題や不安に対し、専門家等の助言を活用した保育への工夫が続けられています。事故後数年の時間が経過した現在も、放射線・放射能の影響に関する様々な情報が提供され、不安などをめぐいきれない保護者の方もいます。日々、お子さんの成長過程に寄り添う立場の保育士の皆さん自身が、納得と安心感を持って、日々の保育に従事していただくことが、子どもさんや保護者の安心につながります。その保育士さんのバックアップの一助となるのが専門家の存在です。これからも、日々の些細な疑問に対しても丁寧に向き合い共に考える支援を続けていきたいと思えます。

放射線生物学研究者の立場から

志村 勉

ヒトの放射線影響は、広島、長崎原爆被爆者、チェルノブイリ事故被災者、高自然放射線地域の住民の疫学調査によって解析されています。しかし、福島第一原子力発電所の事故で問題となる低線量・低線量率の放射線による人への影響については疫学単独での評価が難しく、放射線影響を理解するために実験動物や培養細胞を用いた実験研究により検討されてきました。事故当初は、科学的知見がどのようなメッセージとしてとらえられるのかの十分な配慮がなく、放射線に対する不安を引き起こしたことは大変残念なことです。DNA、細胞、組織、個体レベルと様々な段階での研究成果が人の放射線影響を考える上でどのような意味を持つのか、また研究者間で共通の認識として確立されていることなのかどうかを考慮して説明することが大切です。これまでも多くの研究者が放射線の生物への影響を解明するために研究を行ってきました。原発事故後には、研究者間の情報共有をさらに強化し、低線量放射線影響の解明に取り組んでいます。私は放射線影響研究に従事する研究者の一員として研究や支援活動を通して、今後も福島復興に貢献したいと思えます。